

この夏、わが家の電気供給の契約先を東京ガスに替えた。

いくら電気を使用しても、東京ガス！：なんだか釈然としないが、もれなく電気料金は安くなり、デメリットもない？という。原発事故を契機に、電力自由化に拍車がかかったのは言うまでもないが、それにしても不可解だ。

廃炉費用はいまや8兆円、従来試算の4倍に膨れ上がった。当然この費用は電気料金や税金でまかなうことになるが、果たして、本当に8兆円で収まるのか？廃炉以外の、賠償、除染、中間貯蔵といった、その他の事故対応費用も加えると、20兆円を超えると思われるが、この原発コストの「試算」自体に、何やらキナ臭い匂いがするのだ。「溶け落ちた核燃料」が、どこでどういう状況にあるのか、現状把握すらできていないのに、どうやって廃炉計画を立てることができたのか？そもそも廃炉計画自体が茶番に等しいからだ。

事故後6年、ようやくミニマンボウなる探査ロボットが登場し、原子炉の穴を目視できるようになった。東電が計画的に小出しする動画は、「溶け落ちた核燃料」を映し出すが、原子炉を貫通し、建屋の床の外にあることは確実だ。

しかし、哀しいかな！6年もかけて最先端科学を駆使しても、未だその事実の核心には迫ることができない。

つまり、意図的に国民を騙す壮大な「原発劇場」が、故意にゆっくりと、根拠のな

『さらば！ 東京電力』

文 白石茂樹 text by Shigeki Shiraishi

い計画や、ごまかしの試算を公表して、国民の関心・印象を操作しているのだ。すでに終わっている会社「東京電力」を存続させる理由もそこにある。

「日本の原発」という商品にとって、確たる事故処理スキームと、順調さを装うシナリオは必要不可欠だからだ。シナリオという役割のため生き続ける東京電力には、途方もない税金を注ぐだけの費用対効果はないし、何より一番危険な環境（地震大国）で商品テストを行うこと自体、愚の骨頂である。

そもそも、全国津々浦々、「非核宣言都市」のモニュメントがそびえ立つ、わが国で、核ビジネスが成長戦略なんて、笑えない話だ。

「電気代が安くなる！」優しい言葉のウラには、必ずカラクリがある。一億総脱原発の覚悟は、今や巧みな劇場のもとで「この道しかない」とする原発依存の空気を黙認している。

「この道」を選んだ我々の責任は重い：重すぎる。

100年後の日本人の安全保障のため、いま一度「核」のことを真剣に考えてみませんか。立ち止まって、引き返してみませんか。

東京電力は速やかに原発劇場から降板し、核安全省に生まれ変わるべきだ。そして、100年、100兆円をかけて、抜本的な核縮減と核管理計画を始動させるべきである。



Profile

安全保障・教育評論家／1964年、福岡生まれ。関西学院大学法学部卒業、横浜市役所、議員秘書を経て現職。著書に『概説戦後学校教育』『武徳教育のすすめ』。



美楽での連載を束ねた百念撰集
『雲涯蒼天』
定価700円
Amazonにて販売中